

一条竹鼻勸進猿樂

おもて あきら

応永六年一三九五、世阿弥は一条竹鼻で三日間の勸進猿樂を興行した。その事実を伝える唯一の史料が『迎陽記』(東坊城秀長の日記)で、同書応永六年の条に左の如くある。

○五月廿日、庚寅、晴。今日於一条竹鼻一有勸進猿樂一観世。御棧敷赤松総州禪門用意云々。青蓮院聖護院等入御云々。

○廿五日、乙未、晴。今日勸進猿樂、御棧敷管領奉行云々。青蓮院聖護院等同御見物云々。御大飲、狂言・猿樂数反尺能了。

○廿八日、戊戌、晴。今日勸進猿樂云々。右京大夫申沙汰云々。両門主又御参会云々。

(『大日本史料』七篇之三による)

初日の分のみ「観世」(三郎元清。後の世阿弥)と注があるが、二日目・三日目も観世所演で、場所も竹鼻だった事は言うまでもあるまい。当時はすでに大規模な勸進能は晴天三日間が恒例になっていた。また『迎陽記』は空町殿(足利義満。当時すでに將軍職を子の義持に譲っていたが、そう呼ばれていた)台臨の旨を明記していないが、初日に赤松上総介

義則が御棧敷を用意し、二日目に管領畠山基国が御棧敷を奉行し、三日目に右京大夫細川満元が申沙汰したと言うから、義満が三日とも来臨して見物した事は間違いない。將軍後援の勸進能に管領や四職の武将が御棧敷の準備を整え、將軍を接待するのも恒例であった。「大日本史料」が右の記事に「義満一条竹鼻ニ勸進猿樂ヲ観ル」と見出しを加えているのが当然の処置なのである。

つまり、この勸進猿樂は、足利義満が世阿弥を後援して興行せしめたのであり、義満の世阿弥最良が藤若時代のみならず二代目観世大夫になってからも続いていた事を示す盛儀であった。世阿弥は当時36歳か37歳で、翌年執筆の『花伝』第一年来稽古条々に言う「盛り極め」の時期であった。同条に「此比天下の許されを得ずは能を極めたりとは思ふべからず」と断言するのも、応永六年の勸進猿樂で天下の名声を獲得した自信を背景としているに相違あるまい。

ところで、応永六年の世阿弥の勸進猿樂が催された場所を、『迎陽記』は「一条竹鼻」としている。京都の公家が単に「一条」と書いているのは京都の一条通、またはその附近に相違ないので、今の京都に竹鼻なる地名・町名は残っていないものの、一条竹鼻は当時の京都の一条通近辺のどこかであろうと考えたのが通説であり、誰もそれを疑う人はいなかった。私も無論そう思っていた。

然るに、中公新書の『世阿弥』(北川忠彦氏著) 34頁に、

応永六年……京都郊外山科の一条竹鼻で

「観世」の勸進猿樂を興行している。……とあって、一条竹鼻を山科の地とする新見解が出されているのに驚かされた。別に根拠は示されておらず、山科と明記した当時の記録が残っているはずもないので、山科に竹鼻なる地名が現存する事からの推測に過ぎまいと私は推測した。後に北川氏に直接お聞きした所では、山科の地にかつて条里制の施行されていた可能性があるから今の竹鼻を一条竹鼻と称した事も考えられるのと、応安七年か翌永和元年一三七五の観阿弥の今熊野猿樂や、それ以前の醍醐での七日間の観世猿樂など、観世父子時代の猿樂興行がしばしば京都郊外で行われている事、などを勘案しての推測説の由である。だが、この新説は成り立ちそう

もないと私は思う。

山科の地名竹鼻が昔からのものである事は確かである。『藤涼軒日録』文明十九年一四八七月二十五日の条に

小魯西堂語云、山科之竹ガ、ハナト云在所ニ、地藏寺ト云寺アリ。其寺尊氏將軍之木像アリ。……尊氏之御骨等亦相副在レ之云々。

とあるから、タケハナではなくてタケガハナが本来の呼称であろう。しかし、かつて右の記事をマークした際にも、私は山科にも竹が鼻という地名があったのかと受け取っただけで、それを『迎陽記』の一条竹鼻と結び付ける考えは毛頭浮かばなかった。「一条」は京都の一条通に相違ないという常識的判断が私を支配していたからであろう。北川説を知って右の記事を思い出したものの、義満主催に近い形の、門跡や武將など大勢の貴顕が見物する勸進能が、北山殿や室町殿から十数キロも離れた山科で興行されるはずがないとの常識的判断から、やはり重視する気になれなかった。かといって北川説に反論する気にもならず、ただ放置していたのである。

だが、学生から北川説の当否を質問されたので、念のため京都の地図や町名索引の類を二つ三つあたってみたところ、「瀧ヶ鼻町」が上京区に現存していた。『迎陽記』の「竹

鼻」が山科の同名の地と同じくタケガハナであり、それが訛ってタキガハナに変わった事は十分考えられよう。普通の地図には出ていないので、京都の繪書店で詳細な区分地図を拝見したところ、北野神社のすぐ近く、一条通の西端部に位置している。今は市バスの車庫が町の大半を占めているが、かつては北野神社の境内だったらしい地で、『京都坊目誌』

(新修京都叢書による)にも左の如くある

▲瀧ヶ鼻町 一条通。七本松上る西側より一条通北側、北野神社社苑地に至る迄を云ふ。開発年月不詳。……

町名起原 元北野領にして、下の森と字す。民居の地となるに及び、下ノ森東町及西町の二たり。地名瀧(鼻脱カ)が町ありしを採て、維新の際二町を合併し此名を下す。

神社の境内は賀茂の河原と並んで勸進能には絶好の場所だった。応永二十年の観世大夫(世阿弥)の七日間の勸進猿蓑も北野だった。応永六年当時の義満はすでに北山別邸に居る事が多かったが、そこと北野も近い。『迎陽記』に言う「一条竹鼻」が、今の瀧ヶ鼻町附近、当時の北野社地の一角であった事は、ほとんど確実と言えよう。

さらに言えば、今の瀧ヶ鼻町附近が室町初期にタケガハナと呼ばれていた事を示す史料も存在する。『山城名勝志』巻七の左の記事

がそれである。(新修京都叢書による)

○竹ガ鼻

管見記云、永享五年十月廿日、法皇後小

唯今崩御云々、秋春。五十七。心中迷惑無三于物一驗。

予着三狩衣二參入。於三竹ノ鼻一已入レ夜。

『管見記』は弘安六年二八三から大永三年一五三にわたる西園寺家歴代の記録で、永享五年一四三三の当主は公名である。西園寺家は北山別邸を義満に譲った後にも北山に別邸を構えていたようで、同じ『山城名勝志』に引用された『管見記』の記事から、公名がそこに住んでいた事が知られる。永享五年正月二十七日には「帰北山」とあるし、嘉吉二年一四四二や翌三年には、乗馬で松原や八丁柳(ともに北野の西)を逍遙している。後小松院崩御の際にも、北山の別邸から急いで仙洞御所へ参入したのであろう。その途中、竹ガ鼻で日が暮れたと言うから、北野附近でピツタリする。今の瀧ヶ鼻町附近が昔は竹ヶ鼻と呼ばれていた事の例証と言えよう。宮内庁書陵部蔵らしい『管見記』原本を調査していない点
は怠慢の謗りをまぬがれないが、『山城名勝志』の引用に大きな誤りはあるまい。

以上、『迎陽記』の「一条竹鼻」、即ち応永六年の世阿弥の勅進猿樂興行の場所が、山科などではなく、京都の一条通の竹ヶ鼻であった事の考証である。
(51・12・13)